

都道府県・ 指定都市番号	52	都道府県・ 指定都市名	川崎市	研究課題番号・校種名	1 高等学校
				教科名	芸術（書道）
研究課題	学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究 ○書道 I において、育成する資質や能力と学習内容との関係を明確にし、「A 表現」及び「B 鑑賞」の相互関連を図りながら、生徒の思考力、判断力、表現力等を育成する指導方法の工夫改善と評価方法についての研究				
ふりがな 学校名（生徒数）	かわさきしりつかわさきこうとうがっこう 川崎市立川崎高等学校（691 人）				
所在地（電話番号）	神奈川県川崎市中島 3-3-1 電話（044）244-4981				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.kaw-s.ed.jp/kawasaki-hs/				
研究のキーワード	ICT 共有・交流 動画 デジタルポートフォリオ PDCA				
研究結果のポイント	○ネットワーク上での作品画像や動画の共有・交流による鑑賞を通じて、表現と鑑賞を結び付け、思考を活性化させることができ、主体的な学びの実現に向けた成果を確認することができた。 デジタルポートフォリオによる通時的な自己との対話と、共有による他者との対話は、全員を主体的な発信者とし、PDCA サイクルの実践から「考える書道」というスタイルの構築への発展性の手がかりが明確となった。 ○ICT を活用した対話を通じて、自身の見方や考え方を検証するとともに、言語活動を通して、意見や思いを伝え合い、自身の考えを深めることにより、表現活動への主体的な意欲を高めることができた。				

1 研究主題等

(1) 研究主題

ICT を活用した「共有」と「交流」による書の資質・能力の育成
 ～「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた ICT の有効活用～

(2) 研究主題設定の理由

- ・書を通じて表現の喜びを感じさせ、主体的に探究し構想・工夫に取り組む姿勢を育てる学びの検証。
- ・言語活動による相互の知見・考えを深める学習を、ICT の活用によりさらに充実させる可能性の検証。
- ・表現活動を技能の向上のみで捉えるのではなく、表現と鑑賞の関連により表現活動での思考の深化を図る効果的な学習方法の検証。
- ・本校が有する充実した ICT 環境を最大限に生かし、芸術科書道における学びの深化を図るとともに、メディア・リテラシーの育成にも寄与する学習方法の検証。

(3) 研究体制

- ・校内芸術科・学務部、市立高等学校各教科等研究協議会（年 2 回）、総合教育センターカリキュラムセンター（高校教育担当指導主事・書道担当指導主事）と連携を図る。

(4) 1年目の主な取組

平成30年度	4～5月	・育成する資質・能力の明確化と研究計画立案	・使用ソフト等環境整備確認		
		・動画撮影方法・撮影設定・活用方法・デジタルポートフォリオ書式の試行と決定			
	6～7月	・校内研究授業①	・ネットワーク展覧作成	・メディア・リテラシー育成の工夫	
	9～10月	・ネットワーク展覧の効果的な活用法			・アンケート等による中間考察
	11月～12月	・校内研究授業②③	・研究の検証・まとめ	・資料作成	
1月～3月	・研究成果発表			・今年度の振り返り	・次年度への具体的改善と計画再検討

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

- ① 学びのPDC Aサイクルを支えるデジタルポートフォリオの作成
- ② 表現活動において考えを深める揮毫動画の活用
- ③ 作品画像の共有と交流を通じた表現力と鑑賞力の向上

(2) 具体的な研究活動

- ① 学びのPDC Aサイクルを支えるデジタルポートフォリオの作成
 - ・デジタルポートフォリオとして、単元名、本時のポイント、自己評価、教師の評価、振り返りコメント(個々の課題、よくできた点、改善したい点、次回の目標)、揮毫動画を、毎回スライド1枚にまとめた。次時までに入力することとし、毎時、振り返りから本時につなげた。提出物は実作品とデジタルの両方を課した。
 - ・本時のポイントとして目標(評価規準と同じ)を提示し、自己課題と併せて、課題理解や振り返りの目安とした。生徒は自己評価(ABC)を付け、教師はそれに答えるように評価(ABC)とコメントを記入し、評価を通じたコミュニケーション(対話)を図った。回を追うごとに、振り返りの作文から書表現への総合的な理解が深まっていく様子が伝わってきた。初めは主観的で曖昧だった自己評価が、妥当なものに変容していく様子も見取れた。また、本時のポイントは生徒が分析的に考えることができるよう「用筆、点画や字形、全体構成」として抽象化できるように組み立てた。自然に書に対する見方や考え方を身に付け、各自が本時の学習の目標を自分なりに考えられるようになり、主体的に授業に臨むようになっていった。
 - ・デジタルポートフォリオの作成により、表現することを思考と結び付けることができた。どう表現すればよいのかを考え、目標を踏まえ取り組む様子や、半紙一枚毎に改善しようとする姿勢が見られ、自然にPDC Aサイクルが動き始めていることが見取れた。どうすれば改善できるかを考えることは、分析的に鑑賞し、分析的に構想・工夫する資質・能力の向上につながり、PDC Aサイクルの反復は、方針や見通しを自ら明確化する力の育成につながったという感想もあった。学期末の長期的な振り返りでは、日々の成長や学習の成果の実感、達成感、満足のいく作品にしたいという意欲などを多くの生徒が述べていた。
 - ・デジタルによる振り返りは、効率的で時を選ばない。振り返りたいところに必要な時に戻れ、思考の自由な繋がりや発展を助け、過去の自己との対話を可能にする。例えば、漢字かな交じりの書の学習時には、これまでに学んだ古典のデジタルポートフォリオを自ら振り返り、活用している様子が見られた。
- ② 表現活動において考えを深める揮毫動画の活用
 - ・毎時、個人端末(タブレット)により揮毫動画撮影を行った。撮ること自体に緊張感があり、回を重ねるごとに用筆への意識の高まりが見られた。筆の運び方やつながりが動画として残るため、どう書くかをよく考えるようになり、表現活動を通じた思考の深化へと繋がる様子が見取れた。
 - ・デジタルポートフォリオに動画欄を作り、個々の振り返りに活用した。初期には特に筆の持ち方、

墨量、墨継ぎなどの基本的な事項について様々な気付きを促すことができた。毎時、前時の振り返りから自身の揮毫プロセスを客観的に見取り、用筆についての目標・課題を設定させた。その結果、徐々に表現への意識が高まり、学期末の長期的な振り返りでは、自身の技術的な習熟や向上とともに、思いや意図に基づく表現ができるようになってきたことを自ら実感し、さらに主体的な表現活動へと繋がっていった。

- 場面に応じて生徒の揮毫動画を大型スクリーンで共有し、意見交換と教師の解説・助言を行った。生徒は直感的にコツを掴んだり、自身の用筆と比較検討したりして、他者の用筆から多くの気付きを得た。動画は言語によらない直接的な情報伝達であり、その情報量は予想以上に大きく、動画を用いた共有の後、用筆に迷いがなくなっていく姿が見取れた。また、回を重ねる毎に他者の変容を目の当たりにする場面もあり、それぞれの表現活動への思いや考えを深めることができた。
- 上方からの書画カメラでは見づらい左横からの範書動画を作成活用した。筆圧の変化やリズムなどを分かりやすく直接的に伝えることができ、技能の伝達に有効であることを確認した。これまで机間指導を通じて伝えていたような内容を、より効果的に伝えることができる。

③ 作品画像の共有と交流を通じた表現力と鑑賞力の向上

- 提出作品を個人端末により写真に撮り、校内ネットワークを利用した二つの方法によって共有した。一つは、画像を指定フォルダに入れるだけのリアルタイムの共有である。書いたばかりの作品画像を共有し意見交換することは非常にインパクトがある。しかし、この方法では文字のコメントを付けることができず発言による意見交換に止まり、時間に限りがあるため全員の作品を取り上げることはできない。もう一つは、全員が同時に書き込むことができる教育支援ソフトを利用した共有・展覧・交流である。このネットワーク展覧は、教員が事前に準備する必要があるため次時の共有になる。氏名と作品画像を入れた枠に、まず本人が付箋機能を使って制作意図やコメントを書き、その後指定された何人か分のコメントを互いに書き合い交流した。いずれの場合も自身の端末で見ることができる。
- リアルタイム共有は毎時設定し、客観的に自作を見直し、他者との比較から自身の表現及びその作品のよさや課題を見付ける機会となった。また、異なる捉え方や発想に出会うことで多様性に触れ、刺激を受け、視野を広げることができた。楽しい、面白いという感想とともに、次はこうしたいという意欲が表れ、主体的な取り組みにつながった。
- ネットワーク展覧による交流は、漢字かな交じりの書の学習で行った。全員が同時に発信者になり受信者にもなる。他者からの温かいメッセージや褒め言葉からやる気を出したり、自分では気付かない視点からの指摘を受けて新たな発見をしたり、他者へのアドバイスを考えることで自身の考えを深めたり、互いに高め合う様子が見られた。多くの意見が視覚的に記録され、比較しながら確認できることから、自身の考えの妥当性を確かめながら、新しい視点を獲得していった。こうした対話的な鑑賞から得たものを糧に、主体的に自分らしい表現、新たな表現に取り組み、思いや意図に沿うような用筆を工夫していた。
- メディア・リテラシーを健全に育むために、互いによさを発見し合い高め合うことが望ましく、他者への批評は単なる批判であってはならないことへの理解に配慮した。交流を重ねるうちに、コメントを送る活動を通じて、自らのリテラシーが高まっていることに気付いていった。

3 研究の成果と課題 (○成果●課題)

【表現と鑑賞の相互関連】

○ICTの活用による表現と鑑賞の効果的な関連付け

作品画像や動画のストック(蓄積)を用いた鑑賞により、リアルタイム(同時的)での他者との対話や通時的な自己との対話を効率的に行い、対話を通じた思考の活性化に改善を図ることができ

た。表現から鑑賞へ、そして鑑賞から表現へという展開をICTの媒介により円滑に進めることができた。また、コメントを用いて発言の機会を増やし、主体的な姿勢の育成、取り組みの実現へと繋げることができた。

○「考える書道」の実現

デジタルポートフォリオの作成は、通時的な自己との対話を促し、そこでの振り返りが新たな目標設定や構想・工夫の見通しに繋がった。また、作品画像や動画の共有は新たな視点の獲得を促した。生徒は常に考えることを要求され、自身の考えに基づく表現意図に基づき必要となる技術の習得と向き合い、自らで設定するPDCAサイクルを支えに思考を深めることができた。

●鑑賞場面におけるサイズ感の工夫

作品画像は実物の縮小であるため、全体が見やすくなり、自己評価、教員による評価ともに全体構成に関わる項目での思考・判断の向上が目立った。一方、線の変化や抑揚は小さく見え、生徒の表現は大胆になる傾向があった。次年度の検討課題として一層の工夫・改善を図りたい。

●ICTスキルの向上

目指す活動のために、生徒のICTスキルを揃えることは大きな課題であり、多くの時間を費やした。次年度はグループ活動を取り入れて改善していきたい。また、動画の持つ情報量を十分に生かし切るために、動作環境の工夫など、教員自身のスキル向上が求められる。

【言語活動の充実】

○言語活動を通じた思考の深化と表現活動への意欲の喚起

対話を通じて、多様性の中で自身の見方や考え方を客観的に検証しつつ、思考や判断に基づく言語活動を展開することができた。また、思いを伝え合う体験を通して、自身の考えを深め、次の表現活動への主体的な意欲を高める様子が見取れた。そして、漢字かな交じりの書では、書表現と言葉の内容が合っている作品に多くの生徒が価値を見出し、言葉への感性を大いに働かせる様子が見られた。自分らしい言葉とそれにふさわしい書表現を模索していた。

●言語活動場面の更なる活用の工夫

自他のコメントを組み合わせた言語活動後の変容をリアルタイムで共有できれば、より効果的であろう。表現と鑑賞を更に密接に結び付ける言語活動の方法について工夫が必要である。

4 今後の取組

次年度は、まず、蓄積したデータの活用法を見直し、デジタルポートフォリオの内容や共有場面での使用ソフトの検討を行う。また、今年度は共有範囲をクラス単位としたが、範囲の拡大や縮小を試み、より有効な検証方法を工夫する。さらに、言語活動について、今年度は機会の増加(量的側面)の実現を図ることができたが、次年度はコメント・批評での内容や言葉を学習者とともに吟味し、対話型の意見交換(交流)を有効に活用した自己調整スキルを学習者自身で高めるための教員による支援モデルの検証・確立や、学習者のコミュニケーションスキルの向上及び協働的な学びへの主体性・姿勢の育成について(質的側面)、検証・改善を図るものとする。

5 研究協議会の中で協議したいこと

○本研究では、デジタルポートフォリオを活用したが、ポートフォリオの内容についてのアドバイスや活用例があれば、お伺いしたい。

○ICTを用いた共有の方法を工夫したが、共有の方法についてのアドバイスやご意見を、お伺いしたい。

○言語活動の質の向上について、どのような工夫をしておられるか、各校の様子をお伺いしたい。